

黄金の国ジパング

～平泉発展へ 東アジアと大船渡～

岩手県大船渡前市長 甘竹勝郎

◇日本最初の金

日本で初めて金が産出されたのは、奈良時代の天平21（西暦749）年、陸奥国小田郡、現在の宮城県遠田郡涌谷町であり、当時の陸奥国主から朝廷へ黄金900両（約13kg）を献上したのが始まりとされる。

折りしも、聖武天皇が東大寺盧舎那仏像（奈良の大仏）の鑄造を開始していた（天平9年）。大仏に塗る金の調達に難儀していた頃であり、陸奥国からの金産出の知らせは、天皇を大いに喜ばせ、年号を「天平感宝」と改めたほどであった。そして、万葉の歌人大伴家持は、「すめろぎ（天皇）の御代栄えむと東なるみちのくの山にくがね（黄金）花咲く」と詠んでいる。

これ以降、みちのくの山々に黄金の花が咲くように、北上高地で次々と砂金鉱床が発見され、その最たる一大産金地が、平泉の東方に位置する三陸沿岸の気仙郡一帯であった。

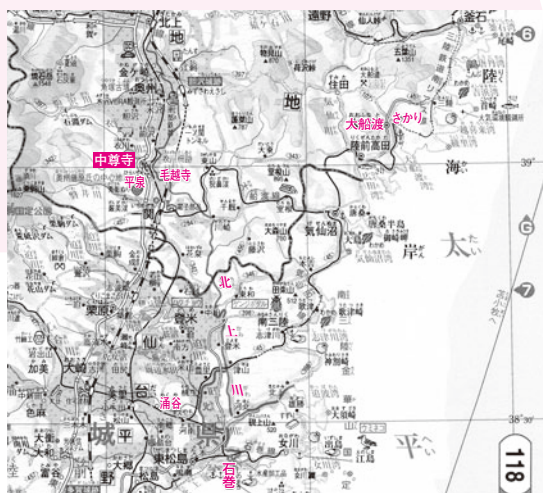
◇奥州平泉における藤原氏の栄華

岩手県南部、人口約8500の平泉町。この地には皆金色かいこんじきで覆われた中尊寺金色堂をはじめ、奥州藤原氏の栄華を偲ばせる遺産・遺構が多数存在する。

現在、この「平泉の文化遺産」はユネスコの世界遺産登録へと脚光を浴びている。ここで、平泉を造り上げた奥州藤原氏100年の歴史についてふれたい。

源平の争いが絶えなかった平安時代末期。前九年の役、後三年の役など幾多の戦乱や悲劇を経て、最終的に北東北の支配者となった初代藤原清衡は、壮大にして平和な都市平泉の原形をつくり、奥州藤原氏四代100年の栄華の基礎を築いた。

その中心が中尊寺金色堂である。清衡は、落慶



「中学校社会科地図」 p.118（現行本p.106）

法要の席で「争いのない仏国土を造りたい」という趣旨の中尊寺建立供養願文を読み上げ、平泉にこの世の極楽浄土をつくることをめざした。

その後、二代目藤原基衡は、毛越寺もうつうじを造営するなど、父清衡が描いた浄土思想を中心として平泉の町づくりに努力した。なお、鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」には、毛越寺はわが国では他に例がないほど立派だと記されている。

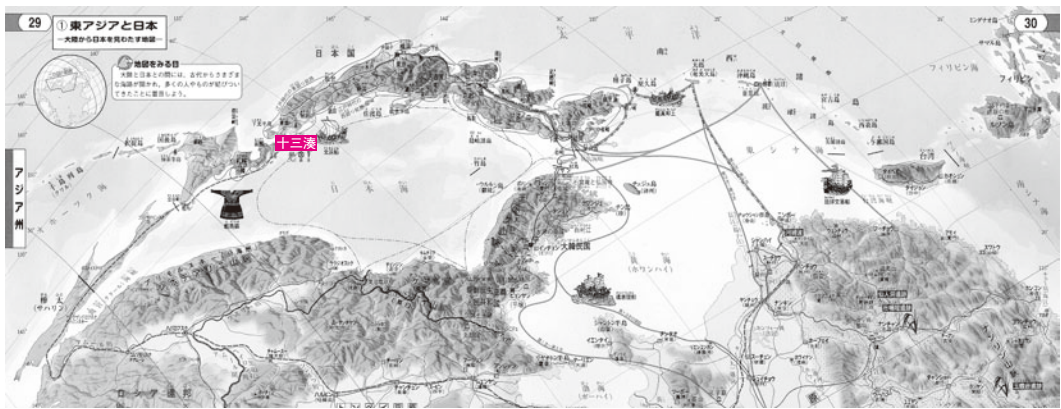
三代目藤原秀衡は、無量光院を造営。この頃は奥州藤原氏の絶頂期で、東北一円に支配が及び、京都に次いで、人口約12万の日本第二の巨大都市平泉が完成したともいわれる。

やがて、平和を願う平泉にも、歴史の濁流が容赦なく押し寄せる。源氏の棟梁源頼朝とその弟である義経との対立に端を発した源氏と奥州藤原氏との戦乱の結果、四代目藤原泰衡は討ち取られ、1189年、奥州藤原氏は滅亡。約100年間続いた平泉の隆盛に歴史の幕が降ろされることになる。

◇平泉の黄金文化と東アジア

ここで平泉の黄金文化の発展と東アジアとのつながりをひも解いてみたい。

皆金色と豪華さで観る者を圧倒する中尊寺金色堂。ここに、8世紀から16世紀まで日本の一大産金地であった気仙郡一帯の金が使用されていたことが、東北地方の歴史学の権威である東北大学名誉教授の高橋富男氏により証明されている。金は、



「中学校社会科地図」p.29～30（現行本p.25～26）

盛浦、現在の大船渡港などから海路石巻を経て、北上川を北上して平泉へ届けられたとされている。

中尊寺金色堂には、金のほか、夜光貝を使った螺鈿やアフリカゾウの象牙など、国内に存在しない装飾品も多く、また、平泉では、中国の宋の陶磁器が出土していることから、当時の国際港であった十三湊（青森県西部）などを拠点とした外国との交易が確立されていたものと推測される。

そして、この豪華絢爛たる輝きが、後世の世界史に大きな影響を与えることになる。

◇黄金の国ジパングと大航海時代

マルコ＝ポーロの「東方見聞録」は、翻訳本の中では、当時、聖書に次ぐ大ベストセラーであった。その中に、「ジパングは、東海にある大きな島で、大陸から2400kmの距離にある。・・・(略)・・・宮殿の屋根は全部黄金でふかれており、道路の舗装路や宮殿の床は4cmの厚さの純金を敷き詰めている。・・・(略)・・・」と記されており、まさに、この「宮殿」のモデルが中尊寺金色堂であったといわれている。

後世、この「黄金の国ジパング」伝説が、時の冒険家たちの夢を駆り立て、大航海時代へと突入する。そして、冒険家たちのめざすその先は、平泉の中尊寺金色堂であり、莫大な金を産出していた気仙郡一帯であった。

◇コロンブスがめざしたのは気仙郡の大船渡

マルコ＝ポーロの「東方見聞録」から約200年後の1492年、サンタマリア号でスペインのパロス港を出港したコロンブスは、「新大陸」発見の偉業を成し遂げることになるが、実は、コロンブス

の本当の目的は、黄金の国ジパング、つまり日本の豊富な金をめざしていたとされている。突き詰めれば、その金の産出地である三陸沿岸の気仙郡、大船渡であった。

それから120年後の1612年、時は、江戸時代初期。後に「ビスカイノ金銀島探検報告」を著したスペインの商人セバステイアン＝ビスカイノが伊達政宗の庇護のもと、大船渡港を探索している。このことは、数年後の支倉常長らの慶長遣欧使節団の派遣へと発展することになるが、このとき、伊達政宗は、天然の良港大船渡港を国際港に位置づけ、外国との交易を行う計画であったとされている。

◇見果てぬ夢の実現～結びに～

コロンブスは、ジパングに辿りつくことはできなかった。しかし、後世の人たちが、彼の夢を継承し、サンタマリア号を復元して、大船渡港入港を達成した。実に「新大陸」発見から500年後の1992年のことである。この偉業を称え、コロンブスがサンタマリア号で出港したスペインのパロス市と大船渡市との間で姉妹都市締結の調印が実現している。

平泉の黄金文化、大航海時代を導いた黄金の国ジパング……。歴史上の重要な分岐点で光彩を放ったのが、気仙の黄金であった。産金地気仙郡に残る金山の遺構、我々気仙・大船渡の誇りと気風が、今も息づいている。

このたびの東日本大震災におきまして、岩手県大船渡市は甚大な被害を受けました。謹んでお見舞い申し上げます。また、一日も早い復興をお祈りしております。株式会社 帝国書院